

第五章	プエルトリコの人口
第六章	所得と国民と国民生活
第七章	今後の問題
参考文献	
あとがき	

序 研究の目的と方法

プエルトリコでは、人々がどのような生活が営んでいるか、それを経済生活を中心にして明らかにしていくのが、この研究の目的である。

けだし地理学が終局的な関心を有する各地域における人間の各様の社会生活のおのづかひは、経済制度のあり方によって相違しているからである。

プエルトリコは、カリブ海の小島であるが、そこには自然的にも人文的にも島全体としての個性とならんで、島の内部での多様性で存在して、一概に一般化してしまうことはできないが、ここでは主として島全体としての個性をとり扱うにとどめた。今日みられる島の個性—その中心としての経済的個性—というものは、それがもたらされた諸条件やその形成過程をみる幸によって明らかにされるが、これらの事は又、島の人々の生活のバックとなつて、島の経済構造を明らかにする上で基本的に必要である。ところで今日のプエルトリコの経済地域性の形成はどの様にして行われたのであろうか。それは“地域の経済発展とそれに基いて具体的な発現形態をとる自然条件”との相互関連的把握によつて理解されるであらう、即ち、島が過去数世紀にわたつて経験したイスパニア重商主義と次いで、アメリカ資本主義の支配によつてその熱帯的気候の下で展開した熱帯性作物への専向化、それが今日のプエルトリコの経済地域性である。ここでは、この様なプエルトリコの地域性形成過程は経済発展史にとどめ、中心はあく迄も今日のプエルトリコにおいた。今日プエルトリコは過剰人口や失業の問題等、非常に深刻な問題を抱えている。それは単にプエルトリコという特殊な島の問題のみでなく米國という大資本主義の勢力圏内にあつて、現代の資本主義経済の矛盾を如実に體現している具体例の一つにほかならない。

八王子盆地の地形と土地利用

古川 晶子

地形と土地利用が必須課題となつたこの卒論に於て、その構成は次の通りである、即ち、選んだ地域が概ねどの様な場所かをしる為、

第一章・概説とし、その中にa位置及び交通、b気候、c地質、d歴史及び行政、e産業の各項目を含めた。第二章・地形には、a地形概説、b各地形面の対比、c地形と土地利用の關係等を書き、第三章・土地利用として、a始めに、土地利用の概況、b農業上土地利用、c土地利用の変化、d近郊農村的性格等を内容とした。(b)については農業を中心に考え、1.作付作物別土地利用状況、2.土地改良進行状況、3.農業用水、4.經營土地面積からみた各地区の特、5.農家構成からみた八王子農業等に分けて分析を試み(d)では、1.家畜導入、2.農器具の導入、3.農地転用状況等から、その性格を理解しようとした、そしてeまとめにおいて今後の見通しを考えてみた。更に、八王子近傍の天然色空中写真(未だ一般的実用化はなされてない)があったので第四章として天然色空中写真について、a天然色航空写真の概要、b天然色航空写真の性能、を説いた。

方法は、地形に関しては航空写真による分類の後、現地を歩いて確かめ、或いは付け加え或いは訂正して地形区分の図を作製し、各地形面にボーリングを行った。土地利用についても土地利用図作製の後、現地との照合を行い地形と土地利用の關係をみる場合、4mmのメッシュによつて各面上の割合を讀んだ。更に土地利用その他についてはできる限り、統計を集め、年度別、地域別、種類別等比較検討した。その為或物を元にして比率を計算した物が多い。なお天然色空中写真については、それについての知識を得ると同時に、地形区分に大いに役立った。

以上の如くして得られた内容はおよそ次の如き物である。

第一章・関東平野の西南隅、関東山地東南麓にあり比較的古くから拓けた部分、周りを丘陵に囲まれ盆地内を五本の川が流れる、ここで扱ったのは主に盆地南部であるが、八王子は交通の要地でもあり、旧市内を中心に消費的傾向の強い所である。大きさでいえば都下第一位の市で伝統の機業が盛んである、谷底平野以外は関東ロームに覆われている。

第二章・丘陵部、山麓緩斜面、上位段丘、中位段丘、下位段丘、最下位段丘、丘陵部平野面の七つの地形面が区分された。何れも浅川及其の支流によつて作られた物で、関東平野の地の面に対比するなら、上位段丘が下末吉面中位→武蔵野面、下位→立川面、最下位→青柳面に相当させ得る物と考えられる。浅川以外はすべて川中2m以下の小川であるが、それらは何れも台地面を深く(2~3m)刻んでいる。丘陵部の谷底において泥崖を形成しているのがみられる。段丘の崖高は所によつて異なるが、上位及中位のそれは10~15m、下位段丘のそれは西部で1m以下、東の谷底平野と接する部分では4m位で

ある。最下位段丘は二次性のロームを載せる。

オ三章・丘陵は主に林であるが斜面耕作も行われている。上位の段丘は穀類が主に作られる畑であり、中位段丘は南部では公共用地宅地として利用されているが西部では畑である。下位段丘に市街地の大部分があるが、その西方は蔬菜作中心の畑である。戦前は殆んど桑畑であったのに今ではごく僅である。その他土地利用での特徴は水田化傾向である。陸穂から水稻への切替が行われている。何といつても八王子の米倉は谷底平野面たる北野・田井地区である。兼業農家の増加は著しい傾向であり、首都圏整備に併つて増々助長されるであろう。家畜導入中乳用牛の増加が目立つが、明治乳業の存在も相俟つて、酪農が併せ行われれば、養業合理化への一歩となるであろう。その他宅地への転向も著しい。

オ四章・天然色写真で最も有効に用いられると今度思ったのは土色である。それによつて高度差の明瞭でない相異なる地形面の区別が容易であつた。

小櫃川下流域の地形と土地利用

松山 泰子

I 地域の概観

小櫃川は房総半島の丘陵に端を発し東京湾に流れてる諸河川の中の一つである。ここでとり上げる下流域とは小櫃川が形づくる小平野の標高5~10m以下の部分である。平野の南北を限るのは両台地の南端部に当る部分でありこの台地の地質は洪積亜砂層の成田層を基盤とし、その上に関東ロームをのせている。小櫃川の平野は房総半島の主な平野がそうであるように、海成堆積面が陸地化した隆起海岸平野に属する。(参) 中野尊正著「日本の平野」、調査地域は行政的にはほぼ木更津市に属し、その産業活動は農業に主力がそそがれているが副業としての水産業(特に海苔、貝類)も重要である。

II 地形

調査地域は低平な平野部であるので地形分類は主として航空写真に頼つた。ここに表れた局所的な排水状況は微地形を分類する上の鍵にさえなる。写真判読と現地調査(主に土壌、比高等)の結果を総合して地形分類図を作る。区分された地形：一般平野面、旧河道、浜堤及砂州、後背湿地、自然堤防(台地)本地区の地形的特色

a. 小櫃川流路の激しい変遷を示す旧河道の断片が沢山みられる事。